

文化学園大学杉並中学校3年

いしづか  
石塚 りさ

私には弟がいる。弟は生後13日目で大きな心臓手術をした。3つの疾患が複合した難しい手術でその時の手術痕は弟の胸に1本の線として今もくっきり残っている。幸運にも手術は成功し、再発することもなくすくすく成長していて身長は150cmを越えている。バスケが大好きな小学六年生だ。

12年前のその出来事は父にも母にもかなりの衝撃だったらしく、めったに口にしない。弟の「2分の1成人式」の時にお決まりの「僕が生まれてからいままでの話を教えてください」を父と母にした時、2人共急に表情が変わってしまいぽろぽろと涙をこぼし始めた。隣で聴いていた私はあの光景が忘れられない。

その話の中で、父がボソッと話したことがある。

「少しでもたくさん働いて1円でも多く税金を納めるんだ。あの時に助けてもらった恩返しをしているんだよ。」

私には父が何を言っていたのかさっぱりわからず勇気を出して父にどういう意味なのかをたずねてみた。

7月初旬に入院した弟が9月中旬に退院する時病院で医療費を払おうとした父はその金額にがくぜんとしていた。しかしすぐに病院職員さんが、この区では15歳まで医療費がまったくかからない為今回も1円も支払わなくて良いことを教えてくれてとても安心したという。父はこの時に「息子さんのご恩は税金でしっかりお返しする」ことを胸に誓ったのだ。

この夏、税について考える機会をいただいたおかげでこのエピソードを2年ぶりに思い出した。そして自分なりにいろいろ考えてみた。税金というものは、その時に自分が人生でどういう場面を迎えているのかによって、まったく見え方も感じ方も違ってくるものなのではないだろうか。税金を支払う＝お金を取られてしまうと見えたり、感じたりすることもあるが、また違う視点から見ると税金を通して誰かを助けたり自分が助けられるかもしれないと感じることもあると思う。事実12年前、私たち家族は税金に救われた。弟の生命はもちろん、父も母も経済的にも心理的にもどれだけ税という存在が心強かっただろうか。父はその事以来、税を納めることへの意識がまったく変わったそうだ。私もこの我が家のエピソードを聴いて改めて税を納めることに對する考え方が確かに変わった。

これからの私は、人生でいろいろなものがたりを体験するのだろう。そして時に税という「魔法」に助けられ、救われたりするのだろう。そしたら次は私が誰かに「魔法」をかける番だ。税を納めて見知らぬ誰かを救ったり、助けたりすることをぜひしてみたい。